

分散会2

司会者 石原 義久
記録者 森口 朝子
会場責任者 本田 精志

東北芸術工科大学 総合美術コース（山形県）

山形市にある東北芸術工科大学の美術科にある総合美術コースでは、コース教育に社会教育主事課程を取り入れた。美術の感性や創造性とともに、社会教育主事課程で学ぶ、ともにだれとでも学び合う感覚、人とやわらかくつながれる態度、相手を認め合い、社会に目を開き、課題に対して新たなことを生み出していこうとする意欲をもつ若者創造教育を行うことに日々授業改善している。大企業への就職を目指すだけでなく、公民館や地域の社会教育の現場でも、そのような若者が人々の学習支援者として就業できる場所を求めている。自分は、だがしや楽校を世界に広げる運動をしている。今回持参したものは、山ぶどうを使った飴や飲み物である。入れる箱は、読み物絵本になるように制作した。時間をかけて物作りをしている。自分の持ち味を生かして取り組んでいく中で成長していく。地域人教育の具体化として行っていけるのではないかと。名刺のないもの同士でつきあっていくことができている。



松田 道雄 氏

飯田OIDE長姫高校&飯田市公民館（長野県）

平成24年度より飯田OIDE長姫高校、松本大学、飯田市はパートナーシップ協定を結び、長姫高校商業科の1年生から3年生までの240人の生徒たちを対象に「地域を愛し、地域を学び、地域に貢献する人材を養成する＝地域人教育」を各学年の授業プログラムとして取組を進めている。これらの商業教育に必要な要素は、生産者や消費者、そして、それらの人々の住む地域特性の理解（マーケティング）である。地域人教育の目指す姿は、地域課題を商業的に解決するアントレプレナーシップをもった生徒の育成である。自ら考えて、行動できる人材を育成することを目標としている。1年「地域を知る」、2年「地域に出る」、3年「地域から学ぶ」のように学年に応じて発展していき、全員が体験している。飯田市の公民館と連携して行っている。第二の地方公共団体として高校生が主体の楽しいまちづくりを理念とした「sturdy egg」という学校の枠を超えた団体も活動している。様々な関係機関の協力があってこそ成り立っている活動である。



浅井 勝巳 氏
島村 駿吾 氏
木下 巨一 氏

松山市久米公民館（愛媛県）

久米公民館では、安全・安心なまちづくりのために、10年前から防犯・交通問題を課題に「まちあるきワークショップ」を実践している。ワークショップでは、小学生・中学生・大学生・教諭・地域住民等が役割分担をして参加し、子ども目線を中心にしたマップを作っている。昨年からは、その手法・目的を継承しながら防災の視点を加えた実践を公民館GPとして久米小学校区から始めている。今年は、北久米小学校区で「生活防災」をキーワードにまちづくりの主体者を育む活動を行った。日常生活につながらない防災ではなく、日常生活と連携を図るために、防災シンポジウム、防災クロスロードなどの活動を行った。ワークショップは、正解があるが、シンポジウムとクロスロードは正解のない活動である。正解のある活動でやり方を学び、正解がない活動で、もしものときのことを事前に悩んでおき、普段からできることを準備していくことをねらいとしている。



松村 暢彦 氏

東北芸術工科大学 総合美術コース（山形県）の 実践について

【表記について】

質問「Q」 回答「A」

感想「感」 司会者の発言「司」

司 山形の大学教員をされているが、様々な場
所で活動されているのはなぜか。

A 場所にはこだわっていない。役に立てるよ
うにしたい。福祉と教育とをつなげ、学びの
要素を作っていきたい。そして、子どもと高
齢者の関係を作っていきたい。

Q それぞれの趣味は何か。

A プラモデルや城作りなど。(全員が発表)

感 自分の好きなものを語るだけでも総合学習
になる。日頃、側面しか見ないから、全体像

である生きがいに関する取組になる。豊かさが広がったり、学び合ったりする関係が大切である。



(分散会での話し合いの様子)

飯田O I D E長姫高校&飯田市公民館（長野県）の実践について

Q 発表にあった活動を高校の科目として行ってもよいのか。

A 商業の中にビジネス基礎という授業がある。報告と販売促進が文科省のカリキュラムの中に入
っている。学習指導要領に記載されている「地域」もあるため、この活動を行っている。

Q 卒業してからも事業に関わることが出来るのか。

A 今年作ったので、学校の持ち物から抜けていけばOBや地域の人も入りやすくなるのではない
か。ここで得たことを社会でどう生かすかが大切である。

司 団体としては、学校の枠をこえた有志団体ということか。

A サークルにすると他校の生徒が入れない。NPOやNPPを考えなくはない。5つのプロジェ
クトをしているが、リーダーがそれぞれ違う。リーダーをしている1・2年生もいるので来年から
も大丈夫である。自分は公民館に就職する。

Q 高校生ならではの活動であって、行政の立場になるといろいろなしがあるのではないか。

A 自由度や流動性があるので、受け止めてもらえるのではないか。

感 公民館がなにかするときには、行政の壁があり、前例がないと言われるがどうか。

感 松山市は保守的な市役所なのでこのような取り組みがきっかけになればと思う。視察にいきた
い。

感 ファーストペンギンは勇気がある。「sturdy egg」はそうである。

感 地域が思いを受けて、他の人を巻き込んで取り組んでいくとよい。

感 社会の背景を考えていくとよい。

Q 高校生が企画して、準備はどこまでするのか。

A 備品はないので借りるなど、どうしようもないことはやってもらう。交渉をしたり考えを出し
たりすることは、出来る限り高校生が行う。

感 ふるさとを愛する子どもを育てたいが高校生ではなかなか難しい。しかし、地域人は育ってき
ていると感じる。

感 今は、担当者がしているが、地域にどっぷりとつかる役の人がいるかどうか。しくみを作って
いきたい。

松山市久米公民館（愛媛県）の実践について

Q 防災に対して自分の意見をもつためにはどうしたらよいか。

A 防災マップを作っていくとよい。小学生だと、地域の方と関わることはほとんどない。コミュニケーションをとってはいないが、地域にはいろいろな人がいる。地域の方の話や情報をよく知ることによって、自分で判断することができるのではないかと。

司 自分で町を歩くことで、防災を自分のものとして感じてくるのではないかと。

Q 防災の活動は、小学校では、何の授業で扱っているのか。

A 総合的な学習の時間で扱っている。

Q 公民館の事業としては、どのように扱っているのか。

A 地域活性化プログラムにより防災の方に費用が出るため、公民館の事業の一つとして取り組んだ。災害がないので、防災の意識が低い。機会を見つけて意識付けを図っている。

A どこが主催となって行っているのか。

Q 4つの小学校と公民館が行ったが、責任者が必要だったので、校長などが主催者となった。実行委員会という形式で行った。

司 主催状況は勉強になる。参加する小学生は何年生か。

A 6年生が参加する。しかし、通学路を9コースに分けると、各グループに小学生が3人くらいになってしまうので、多くの児童に呼びかけた。通学班の班長と副班長を集めて、やってみようという児童を募った。63人が希望したため、一つのグループに7人くらい参加することができた。

司 防災の活動は、全て授業で行ったのか。

A 6年生は、クロスロードを授業で1時間取り組んだが、それ以外は、休日に実施した。

Q 中学校や高校では、どのように防災の活動をしていくか。

A 高校では、地域と結び付けるのは難しい。地域の方の話聞くが、防災の話ではない。大学でも取り組んではいないが、大学生のマニュアルは、まず家へ帰ることになっている。しかし、それではいけないので、これから考えていかなければならない。

司 久米に小学校は4つある。今年は北久米で行ったが、今後はどうするのか。

A 順番に行っていく。

司 プロジェクトには、補助が出るのか。

A 補助は国のお金のため手続きが大変である。今回は市の予算で実施した。制度を作って、市で予算化するのはいかがでしょうか。

司 自分の公民館では、ワークショップとして、小学生が土曜日に半日かけて、全校児童と保護者と自治会などで史跡めぐりをして地域を回っている。同じ公民館の職員として参考になった。

A 小中として、密接な関係があるが、防災はなかなか意識作りができていない。年1回研修を行い、機会があったら場所を見つけて、学ぶことで意識が変わってきた。久米も災害はあまりないが、バックアップ機能として町長の判断で対応している。

Q 高知県でも防災はされているか。

A 20m以内のところに避難する訓練を学期に一度している。地域の方の避難訓練も実践している。

司 防災に関して他に何か。

A 作ったマップを見ると、危ないところは子どもにとって楽しいところである。危なくないように残してあげることが大人の役割である。

感 災害時にお年寄りを助けてあげたのは、中学生が多い。

A 専門の人に助けてもらったのは2人、見ず知らずの人や地域の方が助けている。誰かの助けを待つのではなく、助ける側にまわる必要がある。なぜそうするのかを教える意味のある訓練にすると、実践で生きてくる。